

清川村立宮ヶ瀬小学校

研究テーマ：「自ら考え、表現する子の育成」～主体的・対話的で深い学びを通して～
(極小規模校 宮小 Ver.)

1、実践の目的

今年度は、昨年度よりさらに少ない全校児童数 5 名でのスタートとなり、極少人数のマイナス面を補う取り組みに目を向けるのではなく、むしろ、この状況をプラスに捉えようという発想のもとに研究を進めることとなった。これまでの研究テーマに「極小規模校 宮小 ver.」を加え、極小規模校である宮ヶ瀬小ならではの強みを生かし、児童一人ひとりに合った学びを提供していくことで、テーマに迫ることをねらった。

2、実践の内容

(1) 校内研究の体制

児童数同様、少ない職員数であるため、全職員で研究に関わっていくことを決め、年間計画のもとに、研修会や授業公開・研究協議を含めた 13 回の研究会を開催した。そして研究テーマを始め、研究構想等を共通理解し、日々の取組や実践の情報を発信・共有しながら、研究を進めていくこととした。1 学期は児童アンケートや見取りから個々の児童の長所や課題を明らかにして、具体的な取組を考えた。2 学期は、様々な取組のもとに授業実践と改善を継続的に行った。3 学期は、実践と改善を実践しながら、児童や職員アンケート等をもとに成果や課題について話し合い、次年度への展望も含め、研究のふり返りを行った。

(2) 校内研修会の様子

今年度は、中学校の研究授業の参観後に、

「極小規模校における協働学習の推進」「指導に生かすための評価」というテーマで小中合同研修会を行った。小中の教員が混ざった小グループでの話し合いでは、連携の視点で意見交流ができ、互いの考えを共有できた。また、小中共に校内研究に携わっていただいている講師の講話からは、目指す研究の方向性や取組が妥当であることなどを確認することができた。

(3) 研究授業、研究協議の様子

研究授業は、常に多くの参観者が極少数の児童を見守る形となる。高学年の道徳の授業では、従来の形態にこだわらず、授業者と児童が机を寄せた三角形になり、会話や意見交流が進んだ。また、地区の小学校の先生方を招いての研究会では、授業者の持ち味を生かして、ドローンを扱った新しい学びを提案した。分散会では、人が集まり、顔を合わせて話し合いができる、対面の良さを再認識できた。

(4) 具体的な取組や活動の視点

◆アンケート(児童・職員)等をもとに「児童の伸ばしたい力、付けたい力」を明確にして、児童一人ひとりに合った授業実践を心がける。

◆他校との交流

- ・宮ヶ瀬中や緑小との交流
- ・国頭村立安田(あだ)小学校との交流

リモートを中心に行った交流では、相手校の活動である「安田ガチャ」をヒントに、地元宮ヶ瀬のイベント



で清川の魅力を PR するためのカプセル
トイを企画・提供した。

- マラウィの小学校との交流

リモートによる交流では、互いの文化
を紹介し合い、頭に荷物を乗せて歩いて
みたり、ジャン
ケンや「あっち
向いてほしい」の
対戦をしたりし
て楽しんだ。



- ◆専門分野や趣味・特技等、職員の持ち味
を生かす。

- ◆タブレットなど ICT 機器の活用

- ドローンなどを使った「プログラミングの
学習」の開発。

- リモートの活用。

- ◆学習形態等、従来
のものにとらわれ
すぎず、今の学習
環境を生かす。



- ◆児童とたっぷり話
をしたり、聞いたり
できる環境を日
頃の授業や評価に
生かす。



3、実践の成果

(1) 振り返りから

「極小規模校 宮小 ver.」という目指す
方向性をしっかり示したテーマのもと、
様々な意見や考えを有効に取り入れ、全員
で共有しながら研究を進めることができ
た。児童一人ひとりに目を向けた研究の推
進や様々なアプローチが有効に機能し、児
童等の成長を促すことに繋がった。また、
教師の熱意や工夫、持ち味などそれぞれの
教師がもっている力が存分に発揮された
ことも大きい。また、様々な交流を実践で

きたことは、お互いに伝わることの楽しさ
を味わい、文化や環境の違いを感じられた
貴重な経験となった。

(2) 子どもの変容

児童の表現力の育ちを感じられる場面
が多くなり、児童が自信を持って堂々と発
言や説明、発表をする姿からも、研究の取
組が児童それぞれの持っている力を引き
出し、伸ばすことに繋がったと言える。そ
れは、「自己肯定感や有用感が高まった」
という児童アンケートの回答からも見て
取ることができる。また、教師の持ち味を
生かした日々の授業実践や取組からは、楽
しみながら学ぶ児童の姿や、学習課題をは
じめ学習全体を自分自身のものと捉えて、
生き生きと学ぶ児童の姿も見られた。

4、今後の展開

(1) 今後の研究の方向性

今後も児童の増加は期待できないが、引
き続き「極小規模校 宮小 ver.」を掲げ、
宮ヶ瀬小の強みを生かした研究を進めら
れればと考える。また、幼小中一貫校を見
据えて、よりよい小中交流のあり方も新た
な視点に加えたいところである。

(2) 残された課題への対応

本校は児童と十分に関われる環境にあ
るが、「待つ」「引き出す」ことの重要性に
ついては深められるとよかった。また、児
童自身ももっと自己の変容、伸びを感じら
れるよう、授業等での視点を明確にしたふ
り振り返りや成長が感じられるような足跡を
残す工夫をしていけたらよいと考える。今
後、同学年や小中の交流を充実させていく
ことは不可欠であるため、さらに他校との
交流や小中の連携を図っていく。例えば、
校内研究の小中合同開催などを実現して、
共に研究を進めていくことなどである。